第３節　山梨県韮崎市坂井南遺跡の東海系文化から

赤　塚　次　郎

１．はじめに

弥生時代後期から古墳時代初頭における土器研究は、今まさに新たな方向に進行しつつあるように思われる。それは土器様式をより詳細に、あるいは厳密に規定することによって、ある特定地域の文化の特徴を鮮明にするとともに、流動性を帯びた時間に位置していることを明らかにしていく点にある。人々の日常的な交流や小地域の文化は可動的な時空に存在し、その地域の歴史を育んできた。そして文化の波及は同様に波状的でもあるが、時には歴史的な命題性を帯びた巨大な大波であり、地域文化を飲み込むほどのものである場合もあった。特定のある地域の歴史を概観すると、そこには確かに歴史の基本軸ともいえるような通時的な、一定方向からの文化的な刺激の方向性が認められる。例えば「西からの影響」ということばに代表されるもので、畿内地域からの一方的な文化流入を想定する場合に代表される。しかしながら、時にそれらの動きと大きく異なる文化の波が多様な方向から押し寄せる場合もある。また、まったく異なる方向を志向する場合もある。それは瞬間的な出来事でもあろうが、その意味する問題を正しく評価する必要もある。なぜならばその大地に大きなキズ跡を刻むことがあるからだ。つまり各時代で影響や志向する方向が振れるのであり、必ずしも一定方向といった固定されたものではない。

恒常的に吹く文化の風と、瞬間的に吹き荒れる異風とが絡み合い、豊かな地域史を形作るのであり、この視点を見据えることにより魅力ある歴史像を読み取ることができる。

ここでは山梨県韮崎市坂井南遺跡の調査成果を踏まえて、こうした視点から東海系文化を評価してみたい。なおここでいう東海とは特に記述しない限りは伊勢湾沿岸地域を意味する。

２．甲斐地域の東海系文化

甲斐地域の東海系土器についてはすでに多くの研究成果が報告されている。それに基づけばおおむね以下のようにまとめることができよう。まず現象面では東海系土器の流入は米倉山Ｂ遺跡段階からと考えられており、その後に東海系土器は急速に甲斐盆地内に定着し、新たな土器様式が誕生することになる（小林1993）。米倉山Ｂ遺跡段階で認められるものは、東海地域での廻間Ｉ式４段階からII式１段階にかけてのものであろう。特にＳ字甕にはその特徴が顕著に認められる。甲斐地域の土器編年では２期の後半から３・４期にかけてこうした東海系の文物の定着現象が見られ、甲斐地域独自の土器様式を生み出していくものと思われる。甲斐の土器様式のモデルは、濃尾平野の土器様式である廻間II式前半期の土器様式を基本にしていることは明らかである。こうした東海系土器の参入は米倉山Ｂ遺跡の事例を参照すると、廻間Ｉ式末葉段階にはすでに始まっている可能性も考えられる。すると濃尾平野から東方への拡散の中で最も早くに影響が表面化した地域と考えられる。実はこれと同じような現象が今一つある。長野県中野盆地であり、それは七瀬遺跡の発掘調査成果の中にその一端を垣間見ることができる（赤塩1994）。西暦３世紀第２四半期の中、東海系文化がまず到達した地域は、東海道筋として甲斐に、東山道筋として中野盆地ということになろうか。

やがてその東海系土器をモデルに組み立てた土器様式は再び崩れはじめる。すなわち甲斐５期になると「畿内系」土器にその役割が変化するとの指摘がなされている。そこでいう畿内系とはおそらく屈折脚高杯や小型丸底土器・器台、さらに二重口縁壷などを意味するのであろうが、これらの多くは畿内地域から、あるいは畿内地域で生み出された土器形式であるかは甚だ疑問である。屈折脚高杯・小型丸底土器の型式的な変遷は未だ明確な系列的な研究がなされてはいないし、二重口縁壷には多様な型式が存在する。したがって現状では土器様式が大きく変化する点を強調するにとどめておいたほうがよかろう。４世紀末葉に全国的に影響を与えた第３の地域をも想定しておく必要がある。

ところでこうした東海系土器の定着期間以前はどうであろうか。弥生時代後期後半（庄内併行期とは区分）、甲斐の土器様式は盆地内部の小地域単位でやや複雑な様相を見せるようである。中部高地系を主体とする県北西部、韮崎市以北と、駿河から東遠江地域の土器様式の影響を強く受けるその南部などなど、しかし甲斐盆地内にＳ字甕が散見できるようになると、ほぼ東海系土器群はそれまでの領域を無視し拡散することが指摘されている（中山1991）。弥生時代後期後半以降は基本的にはどうやら駿河湾からの南風が基軸に存在するようでもある。すると２期後半以降の東海系土器の流入の方向性は一貫した文化風の波に状して参入したものであり、こうした文化の参入の基本構造が想定できるようだ。ただ大きな違いはその風が駿河・遠江をも貫く極めて強い東海からの強風であった点である。この点こそむしろ強調されるべきであろう。東海、伊勢湾沿岸部を源とする文化の影響が、むしろ直接的な形でそこに存在する。

ではこうした東海系土器の影響、いや定着によって甲斐の文化はどのように変化していったものであろうか。この点もすでに指摘され、整理されつつある。

まず集落遺跡であるが、２ａ期には「盆地内の沖積地や谷部を臨む位置にある集落…それ以前と比較して極めて高い」地点に立地する場合が多い点や、竪穴住居の被火災住居の占める割合が高く、２期に集中する点が指摘されている（中山1993）。さらに竪穴住居のプランが小判形・隅丸方形から方形プランに２ｂ期を境に大きく変化することも報告されている（中山1993）。こうした点を総合すると明らかに、中山誠二が指摘するようにＳ字甕に代表される東海系土器の参入は文化的な大きなインパクトをもって甲斐盆地に受け入れられた点は否定できないようだ。

さて次に大変興味深い問題である墳墓についてであるが、まず注目したいのが、中道町の上の平遺跡であろう。標高330mの台地上に展開する124基の「低墳墓」が確認されている。そしてその内部は４つの群より構成されており、より広範囲な集団による経営を想定する見解が報告されている（山中1989ａ）。編年的には２・３期にかけての造営と考えられている。さて近年では盆地内部で、前方後方系に属する墳丘墓の発見が増加している。Ｂ１型と思われる墳丘墓を中心にであるが、例えば三珠町上野遺跡・姥山遺跡・甲府市榎田遺跡そして坂井南遺跡からも確認されている。その内容の特徴はまず第１に、東海地域に散見できるようなＢ１型による安定した墳墓形態をとるものは未だ確認されてはいない。つまり墳丘墓群の中にわずかに点在する。特定の階層が全て前方後方型墳丘墓である事例は確認できず、全周型の墳丘墓が主体ではあるようだ。さらに上野遺跡以外では規模的にもあまり大小の特徴は見出し難い。第２にその出現は明らかに甲

斐３期に中心を置く。おそらく廻間II式期に併行する段階と思われるが。坂井南遺跡や上野遺跡のものからＢ型墳の甲斐盆地での出現は３期、あるいは坂井南遺跡の１号墳と２号墳の在り方を踏まえると２期に遡る可能性が高いものと考えておいて間違いなかろう。すると前方後方系の墳丘墓の甲斐地域での登場も、上記した土器様式の画期と連動する動きとして解釈できる。ただし現状では墳形の激変は想定できず、単発的ではある。

甲斐盆地における２期の画期は、土器様式・集落形成・墳丘墓の形などなどの変化を伴っていることはまず間違いないものと思われる。したがって東海系土器の参入とその後の定着は、甲斐における東海系文化そのものの定着と理解しておいてよい。つまりその文化の担い手たち（一定の集団・人々）が移り住み、甲斐の風土と伝統的な社会に同化していく軌跡である。しかしながら、文化的な変革を実現しえたのは、あくまで甲斐盆地の伝統的地域社会の担い手たちであり、東海系はその契機をつくったにすぎない。

ただ１期の中にすでにその萌芽的な内容が認められるようにも思われるが、これは南からの風が吹きはじめる時期とその風に乗って東海からの強風が吹き付けた時期の違いのようにも感じられる。ではその東海系土器とはどのような波及原理をもつものなのであろうか、以下簡単にまとめておこう。

３．東海系文化の波及

ここでいう東海系とは濃尾平野低地部を中核とする伊勢湾文化を意味するものであり、駿河・東遠江地域をも包括するものではなく、除外している。２世紀中ごろを境に濃尾平野低地部の土器様式が周辺の東海地域に広く影響を与えはじめる。山中式中期から後期への移行段階である。その後、２世紀後葉になると伊勢湾には廻間様式が誕生し、より広い地域に影響を与えはじめる。と同時に墳墓においても前方後方型の墳丘墓が広く伊勢湾岸地域に定着することにもなる。各遺跡の共同体墓の中で階層的に前方後方型墳丘墓が造営されていく。また特定個人墓は弥生中期の末葉段階には、遅くても集落内から隔絶していく様子が読み取れる。そしてこうした墳丘墓の大型化は一般の集落内にも波及し、３世紀第１四半期には愛知県尾西市の西上免遺跡の事例のような40mクラスの前方後方墳を一般集落内において造営させている。こうした濃尾平野を中核とするまとまりある文化は、３世紀第２四半期の中で、日本列島に広く拡散していく瞬間を迎える。多くの人々が集団・集落から解き放たれて流動化し、東海系文化が主に東日本社会にもたらされる。（伊勢湾沿岸部の各小地域社会単位で多様であるが）その考古学的な内容は東海系土器・東海系木製品・前方後方墳などとなる。廻間II式期こそこうした動きが最も顕著に現れる。しかしながら廻間II式期には畿内地域と東海地域には極めて密接な関係が出来上がりつつある時代でもあった。（赤塚1996）

以上、東海系文化の波及はまず２世紀後半に山中式後期から廻間Ｉ式初頭にかけて濃尾平野低地部からその周辺部に影響をあたえる動きが見られる（赤塚1993）。その余波は遠江・駿河から相模・東京湾沿岸部に見い出せる。その後にこうした動きの沈静化にともなって東海から駿河湾・関東地域に独自の土器様式分布圏が表面化する。（この傾向はほぼ全国的）廻間Ｉ式４段階から

II式１段階にかけて東海系土器の第１次拡散期が開始される。この現象によりやがて東海系土器が主に東日本へ広がり、東京低地や高崎市周辺部には東海系土器そのものが定着することになる。東遠江や駿河においても同様である。したがって甲斐地域で確認できた上記の現象は第１次拡散期とした普遍化現象と考えて良いものと思われる。つまり遠江・駿河を貫いて吹き付けた強風の正体である。

前方後方墳やその後に広く定着する前方後円墳の時代への道筋はすでにこの段階、つまり３世紀第２四半期における強力な東海からのインパクトによって東日本社会に広がり、その受け皿を用意する。しかしながらすでに畿内や東海では２世紀後葉においてこうした墳丘墓の形態は定型化されているのではあるが。また環濠はすでに弥生後期初頭に廃棄され、（濃尾平野以外では後期後葉）新たな枠組みが急速に整えられつつある。集落の構造も同様であった。古墳時代への胎動は２世紀後半にはじまっている。

甲斐地域の１期はまさに山中式後期から廻間Ｉ式初頭におきた動きに呼応する新たな動きであり、２期後半期にあるＳ字甕に代表された東海系文化の流入と定着は後者である第１次拡散期そのものの影響と考えてよいものであろう。こうした段階的な変遷を経て甲斐の社会は古墳時代へと加速化する。その萌芽はすでに１段階の中にある。坂井南遺跡の成立が２期にありその後の遺跡の動向がまさしく３・４期にあると考えれば、集落の成立は東海系文化の担い手達の参画による、あるいはその動向に強く影響された伝統的社会の変革によってうみ出された集落遺跡であり、墳丘墓の造営であると思われる。

４．甲斐の古墳時代

甲斐地域の古墳時代を代表する大型古墳の造営は、主に盆地南東部に見られる。上の平遺跡を嚆矢とする、大型古墳群の造営と曽根丘陵東山・米倉山周辺は大変魅力的な地域でもある。

さて甲斐銚子塚古墳の造営に代表される甲斐地域の大型前方後円墳の造営と、最古の古墳とされる前方後方墳としての小平沢古墳、そしてＢ型墳の存在を概観してみよう。甲斐地域も他の東日本社会に基本的に見られるような前方後方墳から前方後円墳への墳形の変化が指摘され、評価をえているものと思われる。小平沢古墳は45mの前方後方墳で、主体部は不明瞭ながら斜縁二神二獣鏡と墳丘からはＳ字甕の破片が出土している。斜縁神獣鏡や獣帯鏡は、古墳時代初頭の墳墓に見られる事が多く、破砕鏡として副葬される事例が増加している。これらの諸点からは小平沢古墳が相対的に廻間III式前半期を降ることは難しい。一応ここでは廻間III式前半期でもやや古い段階に位置づけておき、西暦300年前後の年代を考えておく必要があろう。一方で甲斐銚子塚古墳は、169mという東日本社会をまさに代表する前期古墳である点は、誰しも疑う余地はない。副葬品や墳丘に使用された埴輪などから考えて、その築造を松河戸Ｉ式期前半、布留中段階新相併行期におく事が可能と思われる。こうした考え方は従来の見解とも大きく矛盾するものではない。すでに指摘されている点に基づけば、甲斐銚子塚古墳の造営は、天神山古墳や大丸山古墳がやや先行し造営されたようでもある。すると甲斐銚子塚古墳をもって当地域の大型前方後円（後方）墳の造営は基本的には終結し、大型古墳はおおむね４世紀代に集中することになる。こうし

た動向は、美濃地域最大規模の前方後円墳である昼飯大塚古墳の造営をもって、大垣市周辺の大型前方後円（後方）墳の造営がおおむね収束する事例と類似する。甲斐の大型前方後円墳の造営目的を考える上で大変興味深く、また４世紀末葉での大型古墳の収束という点は、ある程度の普遍性が考えられる。

さて小平沢古墳に代表されるような甲斐の前方後方墳が未だ増加していないのはやや不可思議でもある。なぜならば坂井南遺跡の出現と同時に東海系文化が流入していると考えれば、30m～40mクラスの典型的な前方後方墳の造営は容易に推測できるものであり、それは千葉県や長野県などの事例を出すまでもない。甲斐におけるＢ型墳の点在は、現状では集落内の共同体墓の中の一形態にすぎない。ただ上野遺跡の事例のような大型化を想定するならば、東海地域のように階層的な墳丘墓の造営状況が想定できるようでもあるが。いずれにしろ３世紀に遡る前方後方墳の存在と、集落内の墓域における前方後方型墳丘墓の増加は、東海系文化の定着を前提にすれば保証されている。東海系文化の流入により、まず特定集落内に前方後方墳（前方後方型墳丘墓）が発現し、しだいに共同体墓内に定着する。この段階では小規模な前方後方型墳丘墓である場合が多い。やがて階層的な秩序の成就の中で、特定の個人墓として隔絶した前方後方墳が造営される。35から50mの規模を有する小型の前方後方墳が普遍化する。

小平沢古墳は現状では隔絶した造営形態をとり、鏡の所有を可能にした特定の個人墓として位置づけられる。おそくとも３世紀後葉段階ではすでに政治的なまとまりが急速に整いつつある事を教えてくれる。（1997年３月 脱稿）

参　考　文　献

赤塩　仁　1994「弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」『七瀬遺跡・栗林遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19

赤塚次郎　1996「前方後方墳の定着」『考古学研究』第43巻第２号

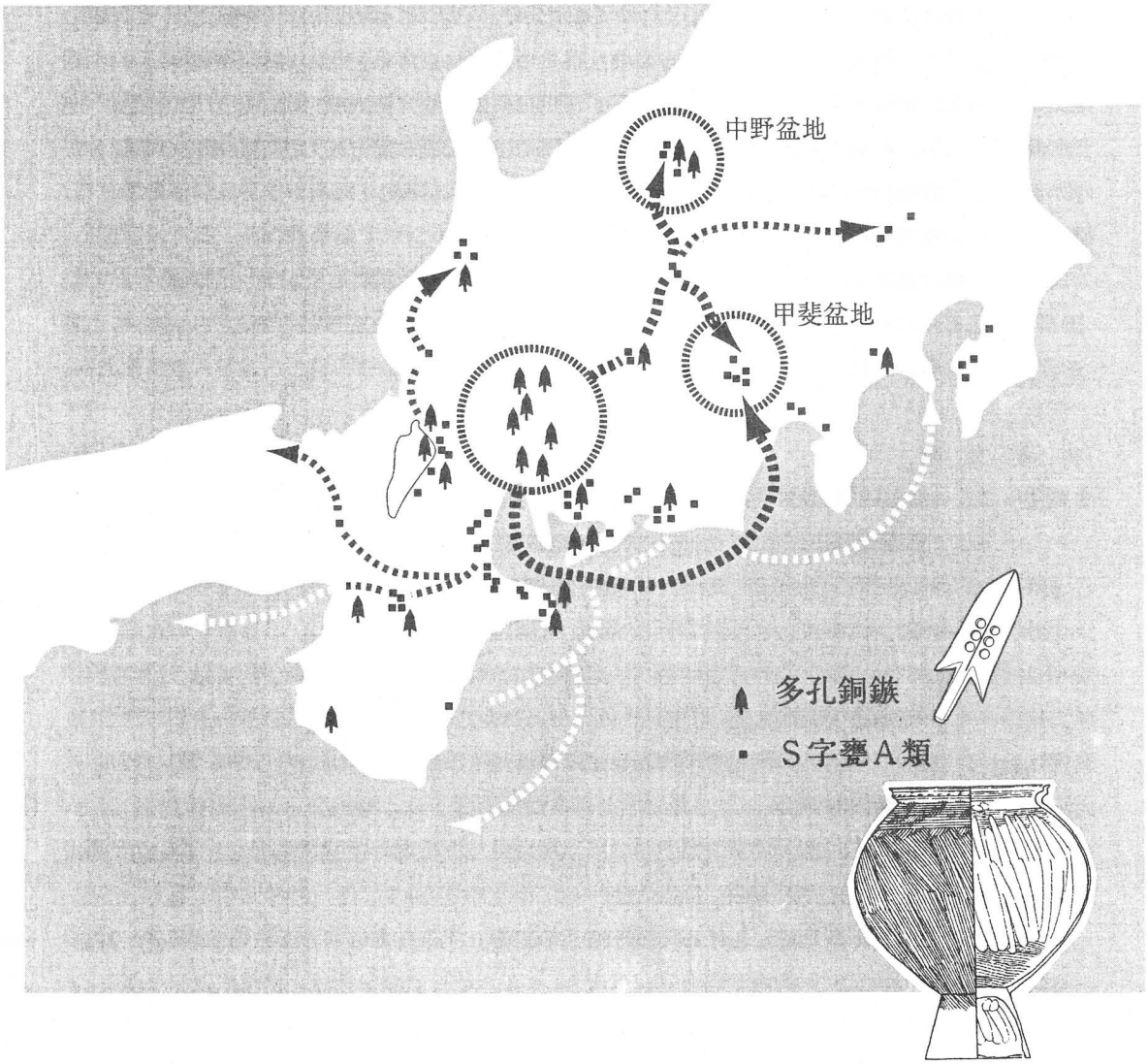
赤塚次郎　1993「山中式という名のデザイン」『考古学フォーラム』３

小林健二　1993「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会　新潟大会

中山誠二　1989「中部・関東地方の弥生集団墓の構成について」『山梨考古学論集』II山梨県考古学協会

中山誠二　1991「山梨県」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』第８回東海埋蔵文化財研究会　浜松大会

中山誠二　1993「山梨県域における集落・墳墓の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会　新潟大会



第91図　東海系のトレース（S字甕A類新段階と東海系銅鏃である多孔銅鏃の分布）